なぜ英語が話せないの

<11>

生徒に会話機会を

先生が〝やる気〟もって

「楽しい雰囲気で生きた英語を学ばせたい」と語るロング先生＝立石中で

日本に住む外国人（外国人登録分）は現在、約百五十カ国七十九万五千人。これに旅行者など短期滞在者が年間百五十五万人おり、合計では二百三十万人を超える（法務省調べ）。四十七都道府県で単純割りすれば、各県平均五万人の外国人が動き回っている計算だが、実際には彼らの多くは首都圏や大都市、観光地に偏在。地方都市の生徒たちが外国人と英会話を交わす機会は皆無に近い。

少ない外国人に加え、入試英語の弊害、限られた授業時間、英会話に弱い英語教師……と英会話の学習を阻む難問山積の環境のなか「せめて一度は生徒に生きた英語を学ぶチャンスを与えよう」という中学校が増えている。

小郡市内では最近、宝城、立石、小郡三中学が相次いで文部省派遣の英語指導主事助手ステイーブ・ロングさん(三六)＝米国コネチカット州出身＝を招き〝一日英語教師〟を務めてもらった。

福岡県教育庁に在籍するロング先生は、県下の英語教師の指導や中、高校での授業担当が主な任務。赴任以来、一年四カ月間に四十三校を回った。

立石中学（高松政道校長、生徒数二百八十人）では、唯一の英語教師である田中玉喜先生が「一日教師」を三カ月前から依頼して、ようやく実現した。

「生徒全員がロング先生と英語で話す。これは貴重な経験ですし、英会話に興味をもつ生徒も増えるでしょう。わずか一時間の授業とは思えない波及効果が期待できます」

こう話す田中先生は、かつてエジンバラ大学（英国）に留学したベテラン教師。「若い先生には負けられない」と、現在もテレビ、ラジオの英会話講座で猛勉中で、昨年は中学、高校教師を対象にした英語研修会にも出席した。

ロング先生の授業では、生徒たちが用意した多彩な質問をぶつけた。「日本の印象はどうですか」から「恋人はいますか」まで。ロング先生は、その一つ一つにユーモアたっぷりに答え、生徒たちはナマの英会話の楽しさを満喫した。

授業後、ロング先生は「生徒の発音は正確で、はっきりしていた」と感想を語った。一方、生徒の方は「英会話なので緊張したが、ボクたちの英語が意外に通じるので安心した」と満足そう。

田中先生は、授業中できるだけ英語で話すよう心掛けている。入試英語の制約で、全部というわけにはいかないが「せめて英会話に対する興味だけは失わないよう指導したい」。中、高校ではクラブ活動でも英会話でも、担当する先生の影響が大きい。立石中の場合「生徒たちの英会話が素晴らしい」（ロング先生）のは当然――と言えるだろう。

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）との指摘がある。しかし、県下の中、高校の英語教師を教えるロング先生は「みなさんの英会話力は相当なもの」と太鼓判を押す。先生はもっと自信をもっていいし「なによりもやる気が大切」である。